

小倉「東洋史学」との交錯

高田淳

蓋棺論定ということばがある。この年になると友人が定年になるという事で一文を頼まれることがあるが、大体はお断りしている。私自身についても同様。故人についての追悼のことばは書いても、これからまだ生きる人について、そしてこれからまだ生きるつもりは論ずることができないと感ずるからである。

それではなぜここにこのような文字を連ねるのか。それは小倉さんとの戦後四十年にわたる因縁の長さで深さが、この際に総括ならぬ回顧的追憶の糸を手繰らせたというべきか。また昨年私の定年に際して、小倉さんが「金澤さんへのお詫び——高田さんと学習院」を書いて下さったということがある。礼は往來を尚ぶという。礼に応えるには礼を以てしなければならない。

そこには金澤さんと小倉さん、そして金澤さんと私という個人的友誼とは別に、学習院という組織の状況を知悉したところからものを見ている小倉さんの視線を感じた。閉塞していた私はその文を読んで融解する安らぎの気持を覚えるとともに、事の次第を承知しながら、然るべきときに応わしいことばによってけじめをつける小倉

さんの透徹した眼とことに忍ぶ情に触れた思いがしたものである。私は小倉さんとは年は一歳違いであるが、大学卒業は四年先輩である。生地が同じ京城生まれであるのは、小倉さんの御父上が私の父と同じ京城大学につとめていたからである。そして数十年後、それぞれが京城再訪のセンチメンタルジャーニーの文を綴っている。二歳までしか居なかった童蒙の私と六年にわたる少年期を過ぎた小倉さんとは意識内容に差があるが、いわば原体験の交錯というべきものがあつたようである。というより、戦後日本をそれぞれの仕方で自覚的に生きようとしたときの歴史の共有があつたのである。

半世紀も前のことを歴史の原点として主張しようというのではない。そのときは二十代の始めであつたのだし、ともかくも自分なりの見方と立場を手探りに摸索していかねければならないと思つていた年代であつた。小倉さんは始めから東洋史学者として屹立していたわけではなかつた。「中国近代政治思想研究」（一九七〇年）というコチたき標題をもつ最初の著書は、副題にいう「左伝」研究ノートであるが、私にとっては「左伝」研究にたどりつくまでの小

倉さんの学と思の遍歴が刻明に述べられていることに関心が唆られた。先行研究に対し揺れ動くわが思に固執し、時代の流れに逆ってわが学を貫徹しようとする志を見ることができたからである。そこに語られている多くの出来事や人びとの名前は、時代を同じくする私も私なりに反応したことがらであった。

東洋史学の徒として論を立てるについて、このような「序説」あるいは「補論」を付する必要があるのだろうかと問うことはできる。学者の読書余録として生涯の断想を語ることはよくあることである。しかし小倉さんの場合は、それとは異なるものがあるように思える。

『吾レ龍門ニ在リ矣—東洋史学・中国・私』（一九七四年）『古代中国を読む』（一九七四年）『順流と逆流—わたしの中国文化論』（一九七八年）『贅疣録』（一九八七年）などに収められた数多くの文章は、生活断片を語るものも含むが、一貫して流れるものは中国を論ずるに当って「私」の立場に照応することなしに小倉さんの東洋史学がないということである。人と学問という単純な対応をいっているのではない。小倉さんが東洋史学という専門を立てるのは、あくまでもそれは小倉さんの東洋史学であるからであり、従ってそこに至る因縁の糸は自ら紡いだものとして、屈曲の姿しながらに自ら語らなければならない。かつて竹内好の「非専門家の方が中国をより本質的に論ずることができる」との発言に抗して、小倉さんは敢えて専門家の名においてその責任と自覚を自らに課したことがある。

小倉さんが孔子の『論語』、司馬遷の『史記』そして『春秋左氏伝』を読む中で書かれた『古代中国を読む』『古代中国に生きる』（その改定版『入門 史記の時代』）の中に、〈原中国〉論があるこ

とに注目したい。それはすでに『中国古代政治思想研究』の補論「現代中国と中国〈専門家〉」の項で提示され、以降の諸論に一貫して継承されたものである。さきの専門家論の発想と同じく、それは毛沢東の革命と文革という現在の課題にいかに対処しうるかという形で提起されている点で、単なる学問の方法論なのではない。それは伝統と革新という一般的対比を意識的に排除するところに成り立つとともに、赤く燃え上る革命中国の潮流に身を委ねることを自ら禁欲する、いわば揺れる意識の自己覚醒が求める投影であったのかもしれない。

それは幻想であったというのではない。現在に生きることと過去に生きたこととを直接対峙させようとするイデーである。『古代中国に生きる』という題目は、司馬遷の『史記』に語られる古代中国に生きた人びとを、専門家としての小倉さんがその古代に同時に生きて描き出そうとすることを告げている。その「まえがき」に次の文字がある。「しかしこの時考えていた〈原中国〉の枠組みの内容は、やや支配の側に偏した大づかみなものであり、いかにしてそういう枠組みができたかという屈折した経過を問うことがなかった。究極的には支配のための知恵に吸収され結果して行くとはいえ、〈原中国〉を準備したものは無数の個人の自発の意思であったというのが私の目下抱いている感想である」。

〈原中国〉といっても、それは中国古代史ではないかということも簡単である。しかし政治思想史もあり制度史もあり経済史もあり、それぞれの様々な視点からの中国研究があることを承知の上で、「本書の狙いは、歴史の厚い地層に埋もれた個人の自発の意思を掘

り起すと同時に、それが体制内にとりこまれて、歪められ押し潰されて行く過程を追跡することにある」とさきの文に続けていうとき、いまに生きる「私」の方から〈原中国〉を読みといてゆく個別的関係性が確かに在ることを知るができる。その読みを小倉さんはわが読みのクセという。クセとは曲者である。「個人の自発の意思」というとき、それは小倉さんの「私」に直接対面するものとして設定されている。

だから小倉「東洋史学」なのであるが、最後に標題の「交錯」について一言する。一つには小倉さんの〈原中国〉論が戦後日本の中で革命中国をどのように捉えるかという問題構造において求められたイデーであったということにつながる。あのときのジャーナリスティックな論争の波瀾とさまざまな対応の切実さと混迷を皮膚に感じつつ、小倉さんは現代と近代の中国の問題を正面に据えて考えていたことがあった。その〈原中国〉論の一つの例証として顧頡剛を見出し、のちに『顧頡剛口述 中国史学入門』（一九八七年）の監訳として公にしたのではないかと推測する。それはさておき、そのころ私も中国の近代思想にウツツを抜かしていたときで、小倉さんは私の論を一つ一つとりあげ、時に過褒のことばを、また時に辛辣な批判を加えてくれた。それらはともに、小倉「東洋史学」からの視線であったと思うている。

中国においてはかの熱潮も変転を遂げ、私もいまは中国近代思想を語らない。しかし小倉さんと共有した時代の体験はいまも残っているし、ただ往時茫茫たりという感慨に託するだけのものではない。それは歴史的化石になったというのではなく、いわば原体験に回帰

することによって一つの歴史となりえたからというべきか。このよ
うな文章を書くのはむづかしい。また新たな「交錯」が始まるはず
であるからである。